

外国につながる生徒の進路形成を支えるための視座について

風張 沙樹 (岩手大学大学院教育学研究科 1年)

1. 研究の目的

日本語指導が必要な児童生徒数の推移から、中高生の増加が著しく、生徒の進学要求の高まりが見て取れる。しかし、未だ年少者日本語教育全体では、中学校から高校への進学や高校生を対象とした研究は少ない。そこで筆者は、生徒の主体的な進路形成のための支援の必要性を感じ、ライフコースを見据えた日本語学習を研究したいと考えた。本研究の目的は、進路形成に影響を与える要因を洗い出し認識や現状を再共有することである。また、それらを踏まえて生徒が主体的に進路を選択し、生活者として社会の形成者として将来を設計するため支援としてキャリア教育と日本語学習を関連させた学習の提案も目的とする。

2. 研究の方法

まず、外国人生徒の進路形成や進路選択に関する先行研究に基づき、進路形成の要因を洗い出す。その要因を学校(指導者)、社会制度、生徒、家庭の4つの軸で分類を行い、要因が進路形成の困難さにつながるのか、あるいは自己実現にうまく働いているのかを挙げる。また、上記の分類を踏まえ、文部科学省「キャリア教育」の視点を用いて、生徒の進路形成のための支援の在り方を検討していく。

3. 生徒の進路形成に影響を与える要因

3.1 生徒の進路を巡る先行研究

3つの文献やデータから、進路形成に影響を与える要因を洗い出し、分析を行った。まず、山崎(2005)の外国人中学生に対する教師の進路指導の実態を「加熱」と「冷却」という視点から論じたものを分析対象とする。2つ目は、外国人児童生徒教育フォーラムでの生徒の進路選択と支援に関する講演、パネ

ルディスカッションの報告書(2009)を取り上げる。3つ目の分析対象として、相川(2011)による外国人散在地域で中高生の時期を過ごした渡日青年5名へのライフストーリーインタビューを用いる。

3.2 先行研究の分類と支援の在り方への示唆
進路形成の要因を4つの軸で分類し、主たるものを以下に挙げる。

- ・学校(指導者)…生徒の存在と進学上の課題の見逃し・認識の低さ、進学を最重要目標とした進路指導、高校での日本語・教科学習支援の不足、居場所づくり など
 - ・社会制度…経済的格差によるアクセスの不平等、入試の壁(特別枠)、地域差 など
 - ・生徒…役割モデルの不在、日本の社会情勢に疎い、自己肯定感の低さ、日本語力・学力の低さ、「入れる」高校への進学による卒業後の選択肢の少なさ、将来像を描けない、複言語使用で選択の幅が広がる、進路ガイダンスなどによる意欲促進 など
 - ・家庭…日本の学校・社会制度に疎い など
- 上記のように複合的でマイナスな要因が多いが、良い効果を生み出すこともある(下線部)。また、社会制度など一朝一夕には解決できない問題が山積している中で、教師や支援者が日本語学習や教科学習の中に将来を考える活動を設定する必要があるだろう。

4. 進路形成を支えるための視座と支援

4.1 「キャリア教育」という視点

キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である。キャリア教育では、4能力から構成される「基礎的・汎用的能力」の育成が重視されているが、外国につながる生徒が

進路を見据える際に困難となる部分と4能力とを照らし合わせると、以下ようになる。

- ①人間関係・社会形成能力…日本語力の不足からコミュニケーション力がないとみなされること、不適応 など
- ②キャリアプランニング能力…役割モデルの不足、進路情報の不足 など
- ③課題対応能力…情報を選択し、活用する力の不足 など
- ④自己理解・自己管理能力…役割意識、自己肯定感の低さ など

日本語力、学力の低さに端を発するものが多く、日本人生徒とは別の視点の支援が必要となる。また「外国人の子どもたちにとり、なによりも重要なことは、子どもの過去といまをつなぎ、そのアイデンティティを支えることであろう。子どもの過去といま、そして未来への発達の軸をつないでいくことが必要であり、そのための支援を考えなければならない」(佐藤、2009:16)とあるように、進路形成には過去を振り返って、ルーツや複言語意識などを捉え直すことが重要で、④の能力の育成を重視しながらその他の能力を育成に努めることが求められる。

4.2「自分誌づくり」による総合学習型日本語教育の提案

キャリア教育の手引きでは、国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各々の領域で、基礎的・汎用的能力の育成に関連する指導事項を挙げている。この指導事項の枠組で「過去を振り返る—現在を見つめる—将来を想像する」という視点からの「自分誌づくり」による日本語学習を提案したい。例えば、キャリアプランニング能力の育成に関連する国語科3領域の指導事項と照らし合わせると「興味のある職業や学んでみたい分野に関する書籍や新聞記事などから必要な情報を取捨選択し、事実と自分の考えを分けて書き、他者と共有し合うことで考えを深める」という活動ができる。発達段階に応じて、語

彙を増やしたり文法を整理し直したりしながら教科学習に必要なことばの力を身に付けていく。そしてその活動こそが自分の良さややりたいことを発見することにもつながり、将来像を描くきっかけになると考える。

5. 研究の成果と課題

進路形成に影響を与える要因については、今回取り上げた先行研究に加えてより多くの事例やインタビューをもとに分類を精緻化していく必要がある。また、将来を見据えた日本語学習の在り方に関しては、提案の形になったが、より具体的に目的や方法を示し、実践から効果を検証していかなければならない。過去を振り返り、現在の自分を見つめることから将来設計していく力の育成と日本語学習の連携が可能になれば、研究や事例が少ないことが指摘されている、高校生やその進路形成に関する研究の発展の一助となり得るに違いない。

【引用文献】

- ・相川和慶 (2011) 『JSL 生徒の進路形成—渡日経験を持つ青年が語るライフストーリー—』 東北大学大学院文学研究科修士論文
- ・齋藤ひろみ・佐藤郡衛編 (2009) 『文化間を移動する子どもたちの学び 教育コミュニティの創造に向けて』 ひつじ書房
- ・佐藤郡衛編 (2009) 『第10回外国人児童生徒教育フォーラム報告書 外国につながる生徒の進路選択とその支援をめぐって』 東京学芸大学国際教育センター
- ・細川英雄 (2011) 『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』 春風社
- ・文部科学省 (2012) 『高等学校キャリア教育の手引き』
- ・山崎香織 (2005) 「新来外国人と進路指導—「加熱」と「冷却」の機能に注目して」『異文化間教育 21』、pp.5-18